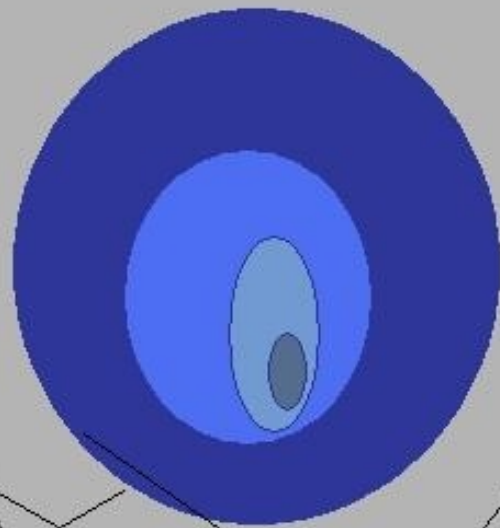


# MY TRAP



## My Trap

---

これは本当にあった怖い話・・・。

忘れもしない6月3日。

一人暮らしを始めてまだ3日程しか経っていないときの出来事だった。その日は霧雨の降る息苦しい夜だった。

新しい生活のはじまり。達也が以前から楽しみにしていた一人暮らし。初めて持つ自分だけの自由な時間。誰からも邪魔されず、外の喧騒とはまるで無関係の6畳間。

しかし、3日も経つとまるで世間から見放されたような感覚に陥った。話す相手もできず、元来テレビのほとんど見ない達也は3日目の夜にしてすでに孤独と退屈を感じていた。

ただ、達也はこうなるだろうという事は予想していたので、趣味のギター、マイク、それとギターやマイクを使って録音できる買ったばかりの録音器材も持ってきていた。

アナウンサーを目指す達也は自分の声がどのようなものか、滑舌はいいのかを知ろうと思い買って来たばかりのその録音機にマイクをつなぎ、何か小説でも朗読して自分の声を録音してみようと思った。

本棚を探すと、つい最近読み終えたばかりの筒井康隆「自選ホラー傑作集」が目にとまり、これを読んでみようと思った。この傑作集の中で最も達也を恐怖にさせた「2度死んだ少年の記録」を読むことにした。

そして、その3ページほどを感情を込め、抑揚をつけて読み、録音した。

達也は早速そのテープを巻き戻し聞いてみることにした。

しかしテープから再生された自分の声は予想以上に恐ろしく、また、さすが「傑作集」だけあって、何度読んでもまた新たな恐怖感が激しく襲ってくるのである。さらに、黙読と違って、音読がさらにその恐怖心をあおるのである。

達也はその恐怖心から、途中でカセットを止め、電気を消し、トイレも我慢して、もう寝ようと思い、ふとんを頭からかぶった。

2, 3分後、達也は自分が住んでいるマンションの5階にエレベーターが止まる音を聞いた。ドアが開き、それから鈴の音が聞こえてきた。「チリン、チリン、チリン」。それと共に地面を引きずるような足音が「ぎっ、ぎあー、ぎっ」と聞こえた。先ほど読んだ「2度死んだ少年の記録」を読んで自分が勝手に想像した、ただれてぼろぼろになった少年が再び頭の中に浮かんできた。音は達也の部屋の方に近づいてくる。「馬鹿な。冗談だろ。そんなことがあるはずがない

」と達也は思った。「そんなはずはない」と頭からふとんをかぶり直し、そう何度も繰り返した。

だが、鈴の音と足音は達也の部屋を通り過ぎ、奥のほうへといった。そして「ガチャ」という音と共に、ドアが開く音がした。

何のことはない。ただ単に足の悪い隣人が帰ってきただけなのであった。

達也は自分の気の小ささが情けなくなってきた。

少し落ち着いた達也は、やはりトイレに行ってから寝ようと思立ちあがった。

もうすでに先ほどの恐怖心はどこかにいっており、さて、小便でもするかと下りていた便座の蓋をあげると、達也は「グウオー」と獣のような雄たけびを上げた。

大量の髪の毛が浮いているのである。しかし、達也はドクドクと心臓が激しく鼓動しているのを感じながら、この髪の毛が何なのかを思い出した。

髪の毛も伸びてきて、しかし髪を切りに行くのが億劫な達也はついさっき、風呂前に自分で切って、トイレに捨てたのだ。後で流そうと思い便座の蓋を下ろしていたのだが、風呂から上がるともう完全に忘れてしまっていたのだ。

自分の馬鹿さかげんに軽いショックを受け、苦笑いしつつ用を足し、トイレの水を流した瞬間、達也は気を失った。

毒々しく真っ青になった水が流れてきたのだ。

達也は薄れゆく記憶の中で思い出していた。

そうだ、俺は髪を捨てた時に、便器が汚れないようにと、買ってきていたトイレ洗浄用品「ドボン」をいれていたのだ。

ドボンを入れて2時間。この世のものとは思えないほど青くなった水が、達也の意識と共に便器の中に吸い込まれていったのだった……。